

中世説話の表現形成（下）

― 説話主体の読みと表現 ―

竹 村 信 治

5 説話主体の読みと表現

改めてこうした言語行為の成立する基底に注意を向けるならば、そこには読む行為と書く行為の連続的な、しかし葛藤を含んだ関係があらわれてくる。表現主体がたちあうのは、すでに文字言語によって表現が与えられて、始まりと終わりをそなえた完結した世界であった。したがって、表現主体はまず依拠本文の読者であり、物語世界が成り立っている諸関係を発見し、状況や場面やできごとを意味づけようとする。物語世界の解釈である。⁽¹⁾

この指摘は、伝承を基本的要件として担う説話の、その伝承のうちに果たされる表現形成の機構を原理的に説明した

ものとして、われわれが常に立ちかえるべき拠点である。口頭伝承の場合も事情はかわらない。「物語世界の解釈」、すなわち、完結したものがたり世界（テクスト）に向かい、「諸関係を発見し、状況や場面やできごとを意味づけようとする」営み、この「読む行為」と「書く行為」を含む「表現する行為」との「連続的な、しかし葛藤を含んだ関係」を内容として説話の表現は形成される。

前節にみた元啓説話の「読みの痕跡」は、ここに指摘される「諸関係を発見し、状況や場面やできごとを意味づけようとする」営みに、説話主体の「物語享受体験とその蓄積」を含めた「知的活動とその蓄積」が参加したことを示す部分。さらに上の説明にしたがうならば、それは、かような「読む行為」と「葛藤を含んだ関係」をもって連続し

た「表現する行為」の具体を示す部分でもあったということになる。つまり、自らの読みを叙述に写し取り、つぎなる説話主体に働き掛け、自身の読みに即してテキストを再構築させようとした、その営みの痕跡でもあったということだ。

たとえば、先の原拠との相違部分3、元啓の父親への諫言について、それを、柳田国男の不審を自らの不審とした説話主体が、自己のうちなる「孝孫原谷」第三伝承によって元啓の行動を補完して読んだことを示す痕跡としたが、これは、その補完的な読みの結果を叙述に写し取って、次なる説話主体の読みを導いたもの。相違部分2は、のちに改心することになる男の親棄て行動の合理的解釈を、呼び出された姥棄山説話との類比のうちに発見したものとしたが、これも、その自らの発見に即して物語を辿らせようとするもの。そして、相違部分4は、説話主体のうちに経験的に認知され蓄積されたとおぼしい「人ノ習ヒ」を参加させて主人公の賢の中身を解釈し、これを明確に示すことで、物語への視線を自らと同じ所に誘おうとする説話主体のたぐらみを伝えているというわけだ。さらに、前節で相違点67にかかわって指摘した、一話の、主人公の賢への注目を孝養の主題に組み込んでいく話末文の有り様は、説話主体が、賢への注目を主題とする第一伝承に「物語享受体

験とその蓄積」としてあった第二伝承を参加させた「読みの痕跡」であるとともに、その「読み」を表現に実現しようとする主体の、「連続的な、しかし葛藤を含んだ」営みを窺わせる。

さて、説話の表現形成にとって説話主体の「読みと表現」が主要な営みとしてあったことは、こうして元啓説話においても確かめられるが、ここで注意しておいてよいと思われるのは、その「読みと表現」にかかわるいくつかの営みが、当然のことながら、一回的な行為としてあったというわけではない点だろう。主人公の賢への注目に連なるもの、そして主人公の孝養への注目に連なるもの。米沢本話は、後者の強調に向けて一話の体裁を整えているが、細部にはなお、「人ノ習ヒ」を用いての主人公の「計ゴト」に対する解釈など、前者への注目に基づいて形成されたのみなしうる叙述が姿をとどめている。つまり、米沢本話は伝承の間の何度かの説話主体による「読みと表現」を重ねさせつつ現前した構造体としてあるということになる。

このことは、説話の「読みと表現」についてのいくつかのことを考えさせる。そのうちの一つは、そのような度重なる「読みと表現」の営みのうちに消去されていった表現のこと。たとえば次のような場合である。

周知のとおり、姥棄山説話は、袖中抄（第十七）が指摘

するように、大和物語と俊頼髓腦の間に相違が認められ、またこの両伝承の折衷をもってなる今昔話によれば両者は相い接して伝えられていたものと見られるが、いま、今昔話が主に依拠し、顕昭が是とした大和物語についてみれば、それは、養母である夷母を妻の言にしたがって山に棄てた男がその夜に後悔して再び迎え取った話として要約できるものである。これを、原谷話と対照してみると、親を棄てた男が改心して後に迎える点が類同し、親を棄てるにいたる経緯と改心の経緯とに異なりが見出される。類同性が本話題を導き、親を棄てる経緯の異なりが、のち改心する父親の親棄て行動に合理的説明を発見させたこと、すでに指摘した通りだが、今一つの異なり、すなわち改心の経緯の相違は、両者の対照を経て、もう一つの「読み」を導く。

家に来て思ひをるに、いひ腹立てけるをりは腹立ちてかくしつれど、としごろ親の如養ひつゝあひ添ひにければ、いと悲しくおぼえけり。⁽²⁾

と内省のうちに改心にいたる姥棄山の男と、子の

人子老父棄山者也。我父老時入之将棄、不能更作。

の言葉に心付く原谷の父と。対照は、父を改心させる原谷の賢を浮彫りにする。その時、親を棄てる経緯の異なりが原谷説話の改心する父親の親棄て行動に合理的説明を発見させたように、改心の経緯の異なりは、「惟孝孫原谷之方

便也」「可謂賢人而已」として原谷の賢を強調する原話の話題の扱いをより増幅して理解させるであろう。

相違点2、すなわち、後に改心する父親の親棄て行動への不審を、親棄てモティーフの類同性から呼び起こした姥棄山説話によって、その行為が「妻詞ニツキテ」のことであつたと改変しつつ説明した説話主体に、改心の経緯の対照をも導いて主人公の賢に注目させる意図があつたかどうかは、意見のわかれるところに相違ない。しかし、その改変された叙述に向かう次なる説話主体の「読み」としてならば、この対照を想定することはできるだろう。第1節に指摘した、中世前夜の、人の「知的活動とその蓄積」を解釈と表現の根源的な前提とする文学状況をいま一度確認し、中世初頭の説話集に多く見出される「ヒトフデ説話」の存在とその意味⁽³⁾、さらには、別に考察を加えた十訓抄の話題連関、また、作品叙述の形成を支えるものとしてあつた、自律的ともいえる編著者の連想の営みに思いを致すならば、姥棄山説話を「物語享受とその蓄積」の一部として持ち合わせるとして説話主体を認定し、その「読み」に、かような対照が成立したと考へて、何の差し障りがあるだろう。むしろ、成立しなかったと見るほうが、かえって不自然というものだろう。モティーフの類同性を契機に姥棄山説話を呼び出した説話主体は、「読みの痕跡」を表現に残す。それは、

類比に基づいて発見された、のち改心する父親の親棄て行動への合理的説明だが、これが叙述に写し取られて次なる説話主体の読みを導くとき、叙述は読みを誘発し、姥棄山を呼び起こす。そして類比の営みに新たな差異を確認し、主人公の賢への注目を増幅させる。かような「読み」の世界を、蓋然性のうちに想定してみたくもある。

蓋然性と言ったのは、その「読み」の世界が米沢本話の叙述によって確かめられないからだが、確認できないもつとも大きな原因は、一話が主人公の孝養への注目のうちに叙述を整備しているところにある。それは、むしろ、叙述の整備を通じて如上の「読み」を拒否しているかのごとくである。原谷第二伝承を呼び起こしての新たな「読み」を「表現」に写し取っていく「連続的な、しかし葛藤を含んだ」営みが、主人公の賢への注目に連なる「読み」を封じ込めていく様態を、ここに認めることも可能だろう。

このことは、次のようにとらえ直すことができるかもしれない。説話主体の「読みと表現」が、自らの「読み」を叙述に実現し、その「表現」のうちに自身の「読み」に即したテキストを次なる説話主体に織り上げさせる営みであるとするれば、それは、「表現」を媒体とする「読み」の伝達にはかならない。その意味では、米沢本話の、主人公の賢への注目に連なる「読み」を封じ込めていく様態は、

「読み」の改変、つまりは「読み替え」と呼べるものであらう。そして、姥棄山説話を持ち込んで主人公の賢への注目を増幅させる読みを、相違点2の改変を契機としてもたらされるものであるが故に、改変をもたらした説話主体のもくろみであったとみるとすれば、その「読み」の伝達は、共有する「知的活動とその蓄積」を背景とした「読み」の継承を意味しよう。ここで注目されるのは、米沢本話にみる「読み替え」が、そのような「読み」の継承の背景にあつて共有されるべき「知的活動とその蓄積」と切れたところに、新たな「知的活動とその蓄積」を持ち込んで成立している点である。これが説話主体に意識的なものであったかそうでないかはともかく、そこに知的共同体のアイデンティティを確かめ合うような説話享受の世界が失われていることは指摘されてよいだろう。「読み替え」はかようにして何らかの位相差を前提に成立する。説話は、「読み替え」をとおして新たな層を重ね、古層を残しまた失いつつ、その全体として次なる説話主体の前に立ち現れる。

注1 森 正人『今昔物語集の生成』（一九八六・二）IV 4「作品の生成」。

2 引用は日本古典文学大系『竹取物語・伊勢物語・大和物語』による。

3 美濃部重克「ヒトフデ説話試論」（語文27、一九六七・五）。

4 拙稿「連想と展開——十訓抄の表現(1)——」(説話・物語論集 12、一九八六・一二)、「連想と読み替え——十訓抄の表現(2)——」(金沢美術工芸大学『学報』31、一九八七・三)、「中世散文学と漢文学——十訓抄を中心として——」(和漢比較文学叢書6『中世文学と漢文学Ⅱ』所収、一九八七・一〇)。

6 沙石集元啓説話の表現

ところで、こうして、説話は、何度かの「読みと表現」を、位相差を前提とする「読み替え」のうちに成立させ、それらを重層させた構造体として立ち現れるが、このことがわれわれに考えさせるもう一つの問題は、かような重層的な構造をもつ説話は、一つの意味を叙述に実現するべく「表現」されながら、一方で、可能性としての多義的な意味を内包するものでもあるだろうという点である。説話の内包する多義性に働きかけて意味を引き出すのは、いうまでもなく説話主体の「読み」であろう。「表現」を媒体とする「読み」が、そこに実現を指された「読み」を受け取れば、それは「読み」の継承であり、別の意味を引き出せば、それは「読み替え」ということになる。

ただ、「読み」の継承といい、「読み替え」といい、そのいずれにも共通するのは、「読む」営みの中身に意味の選択を認めうる点だろう。そして「表現」は、一義的に選択

された意味の実現として営まれる。しかし、一義的に選択されない「読み」、一義的に実現されない「表現」といった「読みと表現」がないわけではない。たとえば、主人公の孝養への注目に基づいて読み替え、叙述を整えたとした米沢本の元啓説話は、沙石集で、一義的に孝養譚として扱われているかと言えば、けっしてそうではない。それは、沙石集における一話の位置によって確かめられることであった。

「一 癡狂人が利口事」段の「死タレバコソイキタレ。イキタラバ死ニナマシ。賢コクゾ死テケル。希有二死スラニ」の変奏としての「二 問注ニ我ト負人ノ事」段、第2段の泰時にかかわってその賢をかたる「三 訴詔人ノ蒙恩事」段とつづく米沢本沙石集巻三の文脈にあって、元啓説話を収める第4段は、第3段に見える、つぎの叙述にかかわっている。

・ 過ガアレドモアラタメ、罪ヲ、カセドモヨク懺悔シテ、後ニ又ヲカサズ、賢人也。

・ 世間ノ人ノ、トガヲハスレテ、人ノ失ヲノミ見テ、人ヲカバミトシテ我身ヲ照ス事ナキコソヲロカナレ。人ヲソシリテハ我身ノ失ヲカヘリミル、コレ人ヲ鏡トスル心ナリ。人ノヲロカニツタナキヲミテハ、我ヲモマタ人ノカクノゴトクミン事ヲ思ヘ。是ノ人則我鏡ナリ。

第4段は、第2節に示したように、冒頭に、南都の「或上人」が来客の前で五歳になってまだ母の添い寝を請う子供を辱めたところ、子に「お父さんだってまだ……」とやりかえされた話題（A）を語り、これにつづけて元啓説話（B）を置く。その二話題は、段末の話末文^cによって、

カレガ如ク、サキノ上人ノ幼子父ヲハヂガマシクニケルニ、又モヒジラヌコソ孝孫ガ父ニハヲトリテ覚ユル。

と対照されて結ばれる。これは、二話題の父親の振る舞いを対照したもの。上人でありながら「世間ニナリテ」あるAの父、祖父を山中に棄てようとする不孝なBの父。この「罪」ある二人を取り上げて、子を「鏡トスル心」なき上人と、子を「鏡トスル心」あって改心した元啓の父との対照。この対照は、第3段の、賢人の有り様についての解説に対応している。すなわち、元啓説話は、そのような「賢への注目」に深くかわる第4段にあって、元啓の父の振る舞いに焦点をあわせつつ語られていたのである。一話の叙述はそれとして主人公の孝養への注目を実現しながら、一方で、別説話との対照によってその父親への注目を果たし、作品の文脈に連なろうとするありよう。それは、まさしく、一義的に選択されない「読み」、一義的に実現されない「表現」、多元的にはたされた多義的な「読みと表現」を伝えているだろう。

もっとも、かような「読みと表現」の様態は、今昔物語集などにも窺いいうところでもある。依拠説話に忠実であろうとする作品にとって、作品「表現」は組織、排列、話末の解説部分によって果たされることが多い。物語り場としての枠組みが作品の主題を明瞭に示し、これに働きかけられて呼び起こされる説話の意味が作品表現を実現するといった図式⁽¹⁾。それは、説話叙述の実現する「表現」との間に、意味の多元化を出来させる。これもそれと同様にして考えるべきものと見られ、それ故に、逆に米沢本元啓説話の依拠説話との近さを思わせることにもなる。けれども、かような「読みと表現」を窺わせる米沢本沙石集に対して、これを改訂してなった沙石集は、また別の「読みと表現」のありようを教えている。以下、沙石集の改訂の具体を辿りつつ、これを見ていくこととしよう。

注1 拙稿「物語の場としての説話集——今昔物語集天竺二部をめぐって——」（『講座平安文学論究4』一九八七・六）。

7 沙石集説話主体の「読みと表現」

さて、米沢本からの改訂はさまざまな形で行われたものと認められるが、まず元啓説話の叙述に即して検討を進めることとしよう。そこでは、米沢本話にみる孝養への注目

が後退させられ、主人公の賢への注目を軸に話題が扱われている。

いま、第2節に引用した梵舜本にしたがってみていくと、改訂後の沙石集における元啓説話が主人公の賢への注目を軸に扱われていることは、話末文の位置の米沢本との相違が、これを端的に示すであろう。話末文はaとbの順序が逆になり、bに続くaには、

イトケナキ心中に、父ヲ教へ、智恵フカ、リケル事、
マメヤカノ賢人ナリ。人ノ習、ヨキ事ヲバ必シモマナ
バナドモ、アシキ事ヲバ習事ヲ、ツミシラセケル心、
実ニ難有コソ。

と語られる。a bの順序の逆転は、米沢本話において両者間に認められた孝養への関係付けを断ち、賢への注目を独立させる。またaにおける、「マメヤカノ賢人ナリ」との認定、或は米沢本話にあった「人ノ習」を父親の理解の内容として語る文脈の消去は、米沢本話のごとき話題への解説ではなく、話題の意味付けとしての話末文の機能を備え、主人公の賢への注目を際立たせるものといつてよいだろう。そして、一話は、このもとに叙述が整備される。たとえば、子の言葉を聞いている父親の心中思惟は、

我、父ヲスツル事、実ニ悪キワザナリ。是ヲマナビテ、
我ヲスツル事アリヌベシ。由ナキ事ヲシツルナルベシ。

とあって、自らの行為を「実ニ悪キワザ」と認知し、「是ヲマナビテ、我ヲスツル事アリヌベシ」と推断する父親の様子を描く。これは、米沢本話を承け、米沢本話の話末文aに解説された改心の経緯にそくして筆を加えたものだろうが、かような改訂は、子の言葉の効果を明確にし、話末文に示される子の賢の強調を一話の叙述のうちに準備するものである。

こうして、改訂後の元啓説話の、主人公の賢なる振る舞いへの注目は確かなものとしてあるが、この改訂そのものは、作品の文脈の改訂にかかわっていた。

米沢本同様、泰時の振る舞いに賢を説き起こした改訂本の文脈は、第3段から本段直前の第5段まで、仏者の学行相違を話題にする。「五 律学者ノ学ト行ト相違セル事」につづく本段(6)冒頭話(A)は、

南部ニ或律僧、世間ニナリテ子息アマタアリケル中
ニ、……

とあって、米沢本の「上人」を「律僧」に改めているが、これは、本段がさような仏者の学行相違を話題にする段構成の文脈に連なったことを示している。そこには、米沢本のごとき、「過ガアレドモアラタメ、罪ヲ、カセドモヨク懺悔シテ、後ニ又ヲカサズ、賢人也。」といった内容の「賢なる振る舞い」を説く文脈はない。改訂本の第3・4・5

段は、米沢本では本段の後に続いており、ここに、本段の位置の、改訂の前後間における逆転を確かめることができる。賢一般から仏者の不賢に及ぶ米沢本と、仏者の不賢から賢一般に立ち戻る改訂本と。それは、沙石集表現主体の律学、僧行への関心に基づく改訂の営みを伝えていよう。改訂本の本段は、かような段構成の改編に対応する形で、A B二話題を引き、説示文を語り、事例を加えて、僧侶の賢ならざる有り様を説くところに傾いた文脈を賢一般にやや差し戻す役割を果たしている。

この間の事情は、自らの著作の読者となって新たな作品形成に向かう表現主体の姿を窺わせて興味深い。注意されるのは、米沢本への「読み」のうちに自らの関心としてある僧行への注目を顕在化させ段構成の改編をもくろむ沙石集表現主体が、この改編にそくして作品の文脈を整えるなかで、元啓説話を「人ヲ鏡トスル」「賢なる振る舞い」の例証として扱う直接的な文脈を失っている点であろう。つまり改訂本においては、元啓説話を父親の行為にのみ注目して扱わなければならない文脈が失われ、子の賢をかたるC関子騫説話、子の賢、継母の賢を話題とするD魯州三賢説話とともに、「賢なる振る舞い」一般の一例に、位置付けを改めているのである。このことは、米沢本、改訂本に、作品の文脈における話題の扱いの上で変化があったことを

教える。B元啓話題が主人公の賢への注目に基づいて改訂されたのは、これによる。すなわち、一話に、主人公の賢をかたらしめることによって、改編された作品の文脈である「賢なる振る舞い」一般を説く文脈を、整えようとしたものと見ることができるのである。

ところで、このようにして作品の文脈の変更に連なりながら一話の扱いを改めている改訂後の元啓説話は、しかし、かような主人公の賢への注目にのみ焦点を合わせて「表現」を形成しているわけではない。このことをよりよく示すのは、一話の話末文b・cの存在そのものだろう。bは、改訂本話において話題を語る叙述に直接しつつ、

此事天下ニ聞コエテ、父ヲ教ヘ祖父ヲタスケタル孝養ノ者也トテ、孝孫トゾ云ケル。

と示される。米沢本同様、「孝孫」たる由縁を説く話としての体裁がとられているところにも注意されるが、作品の文脈の変更に応じて消去されるといったことになっていないばかりか、説話叙述に直結することで、かえって主人公の孝養への注目に基づく一話の「読み」に明確な形を与えたものとなっている点、なによりも重要だろう。話末文aは、これに続いて主人公の賢への注目を促している。つまり一話は、米沢本話以来の主人公の孝養への注目と、作品の文脈の改訂に伴う主人公の賢への注目とを、ともに語る

ものとして「表現」されているのである。

同じことは、話末文cにかかわっても指摘できるだろう。すなわち、改訂後の沙石集においても、米沢本と同じ位置に話末文cが排され、さらに、A話題末尾に米沢本になかった「父ヲ恥シメ教ニ似リ」との「読み」の方向付けが示されることで、対照は意識的に仕組まれる。また、説示文I冒頭の「都ハ人トナラバ賢ナルベキ者也。恥ヲシリ、義ヲ存シ、」の書き出しも、AB二話題の父親の振る舞いを対照した文脈によく叶う。改訂本においても、AB二話題は、父親の行為に焦点を合わせた「読み」を導こうとするものとして扱われていたのである。そして、一話に、主人公の賢とともに父親の賢をも語らせることによって、改編された作品の文脈である「賢なる振る舞い」一般を説く文脈を、整えようとしたものであろう。

主人公の孝養、主人公の賢、父親の賢。一話は、話末文に、作品の文脈に、また排列による対照に、多様な扱いを見せかける。それは、改訂の営みをとおしてのものであるがゆえに、沙石集説話主体の「読み」の内実を伝えるものといつてよいだろう。自らの手で形成した作品の文脈を相対化しつつ営まれる改訂。そこで、自在な「読み替え」に説話の意味をあやつる沙石集の説話主体。それは、いくつかの「読みと表現」を重ねさせて多義的な意味を内包する

説話の様態にかかわっていよう。そしてまた、これに働きかけて多様な意味を引き出しうる、説話の表現性の相対的な本性に目覚めた説話主体の姿を窺わせてもいよう。⁽¹⁾

意味の実現、つまり「表現」について言えば、これは、一義的な「表現」をとることがない沙石集の説話主体の姿を思わせる。さらに、この多義的な「表現」が、依拠説話の利用といった外的事情ではなく、その説話そのものに手を加えつつ果たされているところには、説話主体の多義的「表現」への意思をも認めうるであろう。このようなありようは、たとえば、米沢本話がa bの論理的关系付けを果たして一話の扱いに統一を与えようとしたのと、きわめて対照的であるのはもちろん、依拠資料を写し取りながら作品の文脈によって意味を規定し一義的に実現していこうとする米沢本の「表現」とも大きく異なるものであったといわなければならない。そこには、「読む行為」と「表現する行為」との間の「葛藤を含んだ関係」がない。

沙石集説話主体の、「読む行為」との「葛藤を含んだ関係」をもたずに営まれる「表現」行為。それは、「読みと表現」の、一つの方法としてあった。ものがたりに主体的に働きかけ、「知的活動とその蓄積」を参加させつつ営まれる「読み」が、ものがたりの意味を多義的に発見させ、その、自らの「読み」によって発見された意味のそれぞれ

8 結 び

を、表現主体は多元的な表現に仕組んで写し取り、次なる説話主体に「読み」の世界を提供する。作品の文脈を辿る「読み」は、この多義的表現の中から、文脈に叶う一義を選び取って作品テキストを織り上げる。沙石集説話主体の多義的「表現」は、かような「読み」の世界を導く、テキストの提供にかかわっていた。「連続的な、しかし葛藤を含んだ関係」を「読み」と結んでなにごとかを語ろうとする「表現」から、自在な「読み替え」によって発見された多様な意味を仕掛けて「読み」の世界を提供する「表現」⁽²⁾へ。そして、説話主体は、そのようにして開かれた「読み」の世界に自らも入り込み、一義を選びとって文脈を構成し、テキストを織り上げ、作品を統一に見せ掛けるのだ。沙石集説話主体の「読みと表現」とはこれをいう。

注1 三木紀人「無住の世界」(『日本の説話3』、一九七三・一一)は、無住が連想能力の達人であったこと「雅俗とりまぜて実に幅広い物語に通じていた八宗兼学の僧であったこと」に注目している。

2 同様のことは、拙稿「物語の場としての説話集―語りの空間から読みの空間へ―」(日本文学、一九八七・二)でも、述べたことがある。

以上、沙石集の一説話を取り上げ、その分析を通して説話の表現形成に関する問題に検討を加えてきた。説話主体の、「物語享受体験とその蓄積」を含む「知的活動とその蓄積」の全体を参加させて営む「読み」と、その「読み」を次なる説話主体のうちに再構築されるテキストとして実現すべく果たされる「表現」の営為とを内容とする表現形成の様態は、ここに明らかであろう。説話主体の「読みと表現」は、こうして、説話の表現形成の根源的な前提としてある。そして、中世説話は、これを尖鋭化する形で、表現形成を果たす。「読み」との「連続的な、しかし葛藤を含んだ関係」をもって、発見した意味を叙述に実現していくとする表現から、「読み」の相対性に目覚め、多義的に発現する意味をそのままに写し取って「読み」の世界をこそ仕組む表現へ。中世説話の表現はここに成立する。沙石集は、かような「読みと表現」の様態をもっとも尖鋭化させ、「読み」の拡散、意味の解体に拮抗しつつ、あやうく作品形成を果たしたものであったろう。

ところで、沙石集の表現主体の物語愛好の姿は、彼自身の告白に基づきつつ屢々取り上げられるところである。「身ナガラモ此癖ヤマザル」⁽¹⁾というこの物語愛好の中身が

どのようなことであったのか、軽々しい憶測は慎みたいところだが、話題性への興味だけではなく、かような「読み」がもたらす多義的な意味発見の快楽、あるいはこの多義的な意味を多元的に表現に仕組むことの愉しみといったことがあったのではないか、と思う。

また、

無住の文体は、既定の論理と結語とに常に先取りされていた無住の思想と不可分であり、兼好のそれは、懷疑し批判し追求するという主体的な姿勢と思索と感動に支えられている。

として

無住にあっては、既定の論理の先取りに災され豊富な教学がかえって妨げとなって、対象・事柄が常に普通の面でのみ扱えられ、個々の事柄・対象そのものの特殊性、その事柄に内在する個としての真実が捨象化され、したがって特殊性や真実の発見による感動も概念化され一般化され、すべてが等質化され普遍化されている。

とする指摘も、小論に見てきた沙石集説話主体の「読みと表現」にそくして考えるならば、確かに「既定の論理と結語とに常に先取りされ」てはいたが、その動員される論理自体は動的であり、「普通の面でのみ扱えられ」ながらも、

把握された意味は、一義化されないことで相互に相対化されるありようをたもっているといえるだろう。一義化の回避と意味の相対化。そこから意味への懷疑はとよくない。また、意味への懷疑は既成の価値観への不審の別名だ。兼好のものとされる「懷疑し批判し追求する」という主体的な態度」は、けだし、意味の相対性を認知した沙石集表現主体の、主体的な「読み」への目覚めのうちに兆していたといふべきだろう。

注1 米沢本沙石集巻四「無言上人事」。

2 藤原正義「徒然草と沙石集」その思想と文体をめぐって―
(日本文学、一九六二・一一)。

(一九八八・八・八稿)

(一九八八・一〇・一四改)

後記

前稿「中世説話の表現形成(上)」は『香椎瀉』(福岡女子大学国文学会刊)第34号(一九八八・九刊)に投稿した。

また、前稿及び本稿は、第33回福岡女子大学国文学会(一九八八・七・三)における「説話の表現性―語りの重層、意味の多元性をめぐって―」と題した公開講演の原稿を改稿したものである。